

周辺からの記憶 48

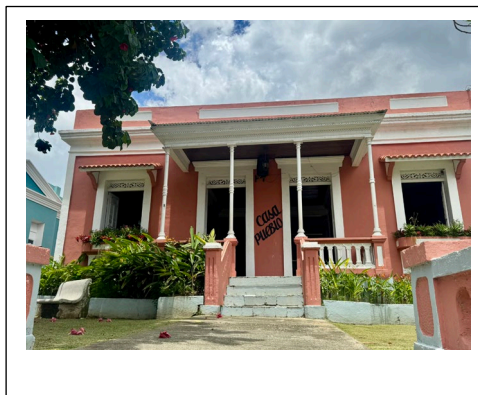
2023年3月 東日本・家族応援プロジェクト in ハワイ

村本邦子（立命館大学）

この夏は、昨年に引き続きプエルトリコに行ってきた。今回は、文化と自立したコミュニティがテーマとなった。アドフンタスという山岳地帯の小さな町に、カーサ・プエブロというコミュニティ拠点がある。ナオミ・クライン（2019）『楽園をめぐる闘い―災害資本主義に立ち向かうプエルトリコ』（堀之内出版）を読んでから、是非訪れたいと思っていた。滞在地であるサンファンから離れており、交通手段もないため、思い切ってレンタカーを借り、1泊2日のミニトリップをした。

1970年代、プエルトリコ政府がこの地で銅鉱山開発を計画した。住民は環境破壊に強く反対、鉱山開発を阻止した後、森の保護活動を展開し、1980年にカーサ・プエブロが設立された。1990年代には、文化・教育活動が活発化し、コミュニティ・ラジオ局もできる。音楽学校や美術館を運営し、子どもや若者への文化教育を推進、環境保護だけでなく、地域文化を育てる拠点へと拡大していった。2000年代には、プエルトリコの電力依存に疑問を呈し、太陽光発電による自立が提唱され、「エネルギー主権」を掲げて政策にも影響を与えた。2017年、プエルトリコを襲ったハリケーン・マリアで全島が停電するなか、太陽光で電力を確保していたカーサ・プエブロは、避難所・医療支援・情報発信の拠点となった。

現在も、環境教育、文化活動、太陽光エネルギー普及を三本柱に、コミュニティから社会を変える拠点として活動している。驚いたことに、プエルトリコにはこのような自立型コミュニティが次々に芽吹いており、地域ごとに特色あるアプローチで社会課題に挑んでいることだった。しかも、その中心を担っているのが若手アーティストたちだった。これをどうやって日本にもってこれるのだろう。



「東日本・家族応援プロジェクト in ハワイ」企画

2014 年、学外研究で 3 ヶ月ハワイに滞在した。そこで、息子が親しくしている人たちと知り合った。サンフランシスコやニューヨークに暮らす日本人たちと同じく、ハワイに暮らす日本人たちも、遠く離れた故郷への強い思いがあり、さまざまな形で支援活動をしていた。情報交換や交流をしたり、ボランティアをしたり、講演会も開いてもらった。

とくに、震災直後から大きな鉄板を JAL に積んでもらって、頻繁に現地に通い、焼きそばを焼いている MOVE4 Japan 代表の竹林篤さんは、東北以外の被災地にも通うようになり、熊本地震の時には、同時期に熊本にいたことがわかって合流し、急遽ボランティアに参加させてもらったこともあった。

そんな関係から、十周年の記念の時期には合同で何かしようと話していた。それがコロナ禍で流れ、2023 年 3 月にようやく実現したのだった。

竹林篤さんや巖谷奈々さんを始め、多くの方が実行委員会を作って企画を進めてくださった。コンベンションセンターで開かれる第 27 回ホノルル・フェスティバルに合わせて、2023 年 3 月 10 日（金）～12 日（日）「東日本・家族応援プロジェクト in ハワイ」をすることになった。

日本とハワイの交流は明治元年 1868 年 5 月に最初の日本人 149 人の渡航に始まり、1885 年の日本ハワイ両政府間の契約による移民（官約移民）以来、100 年以上の長い歴史を積み重ね、現在の四世、五世の人々にまで受け継がれている。今や、ハ

ワイの人口の 5 分の 1 を日系人が占め、年間 150 万人近くの日本人がハワイを訪れるといった、政治的にも経済的にも不可分の緊密な関係を築いている。

こうした歴史的な経緯において、日本とハワイ双方の人々が旅行を通じて相互往来するだけでなく、お互いの歴史と文化をさらに深く知り、心と心つながる草の根レベルでの真の交流を広げる事が求められてきた。そこで、日本各地のお祭りをはじめ文化・芸能並びに武道・スポーツ、手芸などの様々な交流を通じて日本とハワイの交流を更に深めるため、ホノルル フェスティバル委員会を組織し、1995 年 3 月に第 1 回ホノルル・フェスティバルを開催したのだという（公式 HP による

<https://www.honolulufestival.com/ja/festival/>）。

3 月 8 日（水）朝、団さんと一緒にホノルルに到着。竹林さんと巖谷さんと食事しながら打ち合わせをした。



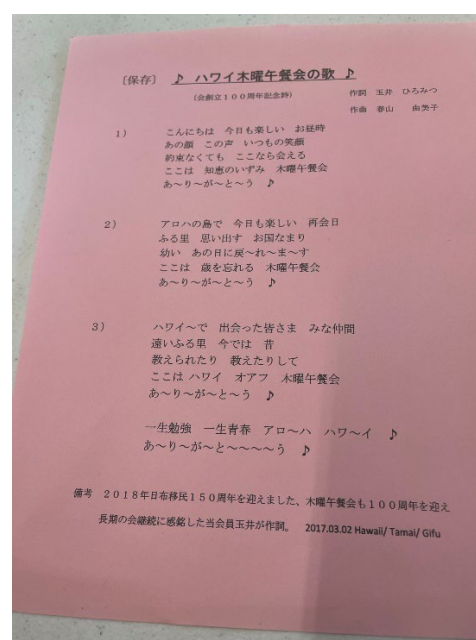
3月9日(木) マキキ教会午餐会

11時半ピックアップで、マキキ教会午餐会へ。ここで、講演と漫画展をすることになっていた。マキキ教会はお城の形をした不思議な教会である。



公式 HP によれば、マキキ教会はプロテスタント教会で、1894 年、ハワイに移民した日本人である奥村多喜衛（おくむらたきえ）牧師が開拓伝道を始め、1904 年に奥村牧師ら 24 人で組織され、1908 年からはハワイ最大の日系教会として重要な役割を果たしてきた。1932 年には、ハワイに美観を添え日系人を励ますために、「神はわが城なり、わが避けどころなり」の聖句から奥村牧師の故郷である高知城を模した教会堂を建てた。世界大戦の苦闘と戦後の復活と成長を見てきた。奥村牧師は、「教会だけでなく広く社会に出て働く」を信条に、生涯をハワイ日系人社会のために捧げた。 (<https://mccjp.org/>)

80 代、90 代の女性、男性が 50 人ほど集まってくれる。始まりは、「ありがとう」という午餐会の歌をみんなで歌うところから。歌詞を聞いていると、遠く故郷を離れて、つながり、学び合い、死ぬまで向上しようという内容の歌で、みなさんの思いが伝わってくる。



机の上に漫画を並び、私は「東北の復興と民話の力」のテーマに、東日本大震災による大きな被害から人々が立ち上がり復興するにあたって、土地に根差した民話を伝える活動が大きな力を発揮したことを話した。おもには山元町の民話の話だったが、みなさんそれこそ食いつくように前のめりに聞いてくださり、終わった後もたくさんの感動の言葉を伝えてくださった。

参加者それぞれにさまざまな背景があり、書道で看板を書いてくださった男性は、名古屋に暮らしていたが、60歳で妻を癌で亡くし、牧師になりたかったので、そこから学校に入って牧師になり、ハワイに赴任してきたという。また、ハワイで生まれ育った二世で、「日本語は下手です」という人たちもいた。



KZOO ラジオ

終了後、ホノルル・フェスティバルでの私たちの企画の宣伝のため、KZOO ラジオの生放送に出演する。パーソナリティのコーンさんがリードしてくれ、あきらめんのパイナップルラップでオープニングを飾る。あきらめんとは私の息子で、数年前ここに暮らしていた頃、コーンさんははじめ多くの人たちのお世話になっており、あちこちでラップをやっており、何度かラジオにも出演させてもらっていた。

4人で出演し、楽しいひとときとなった。



パロロ本願寺

それから、パロロ本願寺に行き、パンフレットのコピーをさせてもらう。なかなか思うようにいかず、篤さんが苦勞してようやく仕上げてくれた。藤森和尚にお世話になった。お寺の庭には大きなマンゴーの木があって、夏にはマンゴーがたわわになるらしい。13日月曜日にここでも漫画展をさせてもらうことになる。

こちら公式 HP によれば、パロロ本願寺の起源は、1922 年に建設されたモイリリ東本願寺である。高速道路の建設に伴い、現在のカймキの場所への移転が決定され、1962 年にパロロ本願寺が建設された。元の定款には「地域社会の一般福祉の向上」が目的として掲げられており、現在もその理念に沿って、3R（リデュース、リユース、リサイクル）を基にしたコミュニティ有機農園の運営など、環境問題への取り組みを通じて、パロロ本願寺が地域社会の一員として認識され、地元の人々と共に歩むことを目指している。

<https://www.palolohongwanji.org/>

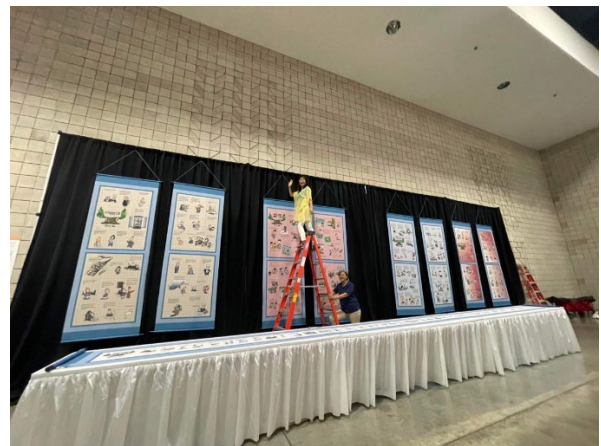


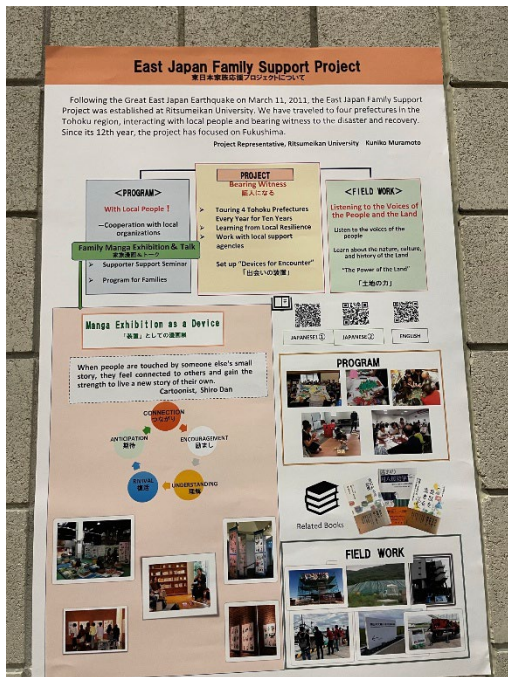


パロロには大きなマンゴーの木があり、ツリーハウスになっていた。夏に来たら素敵だろう。マキキ教会にしても、パロロ本願寺にしても、日系移民の拠り所、コミュニティとして位置づいているようだ。

3月10日（金） 準備

お昼、立命館の修了生と落ち合った後、コンベンションセンターで設営準備をする。ハレの会に方々や実行委員会のみなさんがとてもよくしてくださり、心配していた漫画展示もバッチリきれいにできた。





命灯会

19 時からは、ハワイ大神宮で命灯会。公式 HP を見ると、第二次世界大戦の勃発に伴い、ハワイ大神宮の土地と建物はアメリカ合衆国政府によって接收され、競売にかけられた。しかし、この組織は戦争中も宗教施設としての身分を維持し続け、1958 年 11 月 1 日、この場所に永久的な本拠地を確立した。ハワイ大神宮は、アマテラスオオミカミをはじめ、その随伴する神々、そしてハワイと世界に貢献した歴史的人物であるジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン、カメハメハ王、カラカウア王など、多くの神々を祀っているのだそうだ。毎日朝と夕方に、人類の平和と幸福、調和ある世界の実現を祈る祈祷が行われている。

HP の文面のなかには、下記のような記述があり、興味深い。「第二次世界大戦前、日本の指導者たちは彼女を国家の神として崇めていました。この指導者たちの傲慢さが、日本の敗北を招いたのです。彼らはアマテラスオオミカミを自分たちだけのものとして独占しましたが、太陽のような普遍的な存在に対して独占権を主張する愚かさや無意味さに気づかなかったのです。」

<https://daijinguemple.org/>

ここハワイでは、毎月 10 日の 19 時 46 分、日本時間の 11 日 14 時 46 分に命灯会を行っているという。もともとは気仙沼の二人が始めたものをハワイで奈々さんが引き継ぎ、篤さんと二人で続けているのだという。今回は神社だったが、その時々で、お寺や ZOOM、仙台駅でもやったことがあるという。宗教を問わず、日系コミュニティが集まって東北に思いを寄せる日になっているようだ。

20 人ほどの小さな会であるが、持ち寄った食事をつまみ、神道のみそぎの儀式をして、キャンドルに灯りを点し、それぞれの思いを共有する。



祝詞には、「福島第一原発、第二原発が爆発し、怪しき煙が立ち上り・・・」といった文言や、津波に襲われた人々の生々しい描写も含んでいて興味深かった。

この様子は今も you tube で見ることができる。

<https://youtu.be/YYZhCPMifzE>

3月11・12日

ホノルル・フェスティバル

朝からコンベンションセンターに行き、「ふながだの海」を見る。これは新地町の漁師さんの話である。新地町と篤さんは深いつながりがある。小野春雄さんを主人公にした紙芝居をアニメーションにしたものである。実は、私たちも2019年にここを訪れ、小野さんにお話を伺ったことがある。また、紙芝居を作成した福本英伸さん（一般社団法人「まち物語制作委員会」代表理事）とも、いわきで一緒に過ごしたことがあった。このアニメには篤さん自ら英語の字幕を入れたという。被災から出会うまでの小野さんのが埋められ、理解が進んだ。

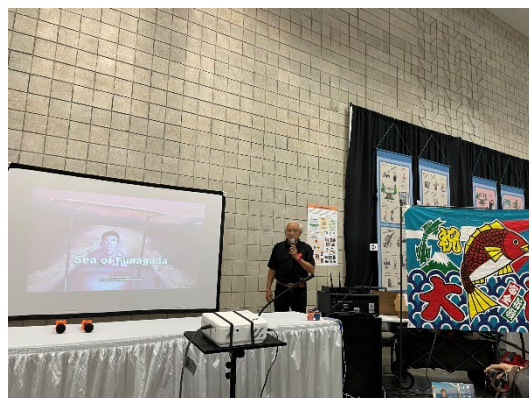
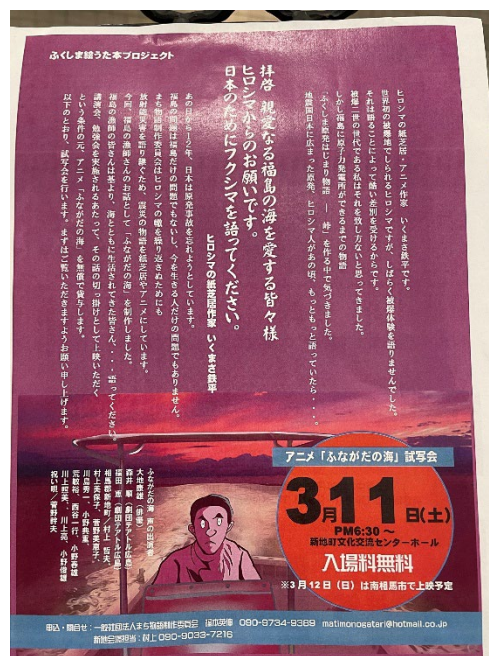
小野さんは十年前の津波で弟を亡くしている。自宅一帯は建物がごっそりなくなり、漁具もすべて流された。慣れない仮設住宅で暮らし始めたが、弟さんが行方不明になったショックと先行きへの不安が重なり、体調を崩した。4か月後に身元不明で見つかった遺体がDNA鑑定で弟さんだとわかった。「生きている俺は弟の分まで漁師を続けないとだめだ」と感じたという。

新地町の漁業も少しずつ復活しているが、風評被害が立ちはだかり、取引価格は下がったまま。「福島の中の姿を正しく伝え、漁師仲間を元気づけたい」と聖火リレーに応募した。感染防止のため、大好きな店でのカラオケもやめてこの日に備えた。

小野さんが走ったコースは釣師（つるし）防災緑地公園。かつて自宅があった地区だった。沿道に集まった友人たちは大漁旗をはためかせ、「福島と生きる漁師」と書かれた横断幕を掲げて応援してくれた。「走りながら昔の風景を思い出していた。津波

で亡くなった弟も、親戚も、海から見守っていてくれたと思う。仏壇に線香をあげて、無事に走りきったと報告をしたい」。

福島が多様な声が重ね合わせられていて良い内容だった。私を含む少なからぬ人にとって苦々しい思いを重ねていたオリンピックだったが、小野さんにとっては、「わくわくしながら走った。本当に楽しいひとときだった」のだ。



それから、団さんは「物語が支えるもの」、私は「福島のに思いを馳せる」というテーマで話をした。どちらもボランティアの方が通訳をしてくださったが、それぞれに興深い背景を持っていた。



12日にはフリートークの時間を持った。福島出身の方などが思いを語ってくださった。ホノルル・フェスティバルは盛況で、各県人会がブースを出していた。県人会は県から助成を受けていることもあり、福島県人会は復興一色の展示となっていたのは少し残念だった。



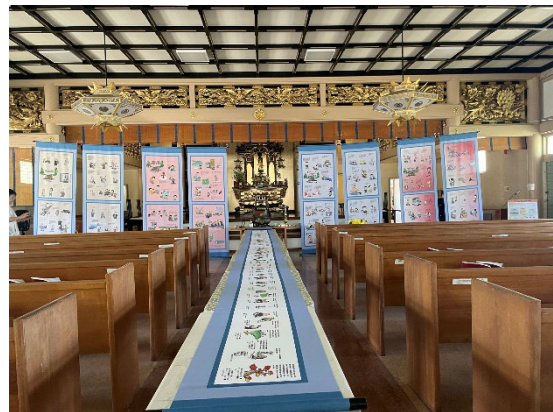
長岡花火

ホノルル・フェスティバルの最後は、日本から贈られた長岡花火がワイキキビーチで打ち上げられることになっている。長岡花火には、戦争で亡くなった人々への追悼と平和への祈りが込められており、長岡市とホノルル市の姉妹都市交流のシンボルなのだそう。ハワイに来て、長岡花火が見られるなんて思ってもみなかった。平和を願いつつ、花火を楽しんだ。

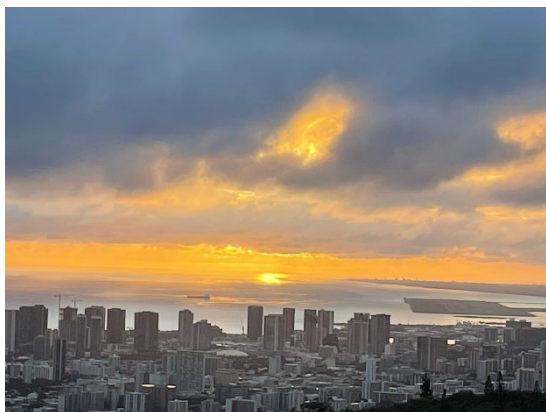


3月13日(月) パロロ本願寺での漫画展

パロロ本願寺での漫画展のため、朝から言って設営する。お堂いっぱい漫画を展示した光景は圧巻だった。ハワイに住む友人たちやその知り合いなどが口コミで来てくれた。際入れもあり、東北のボランティア活動をしている方たちとの情報交換もできた。

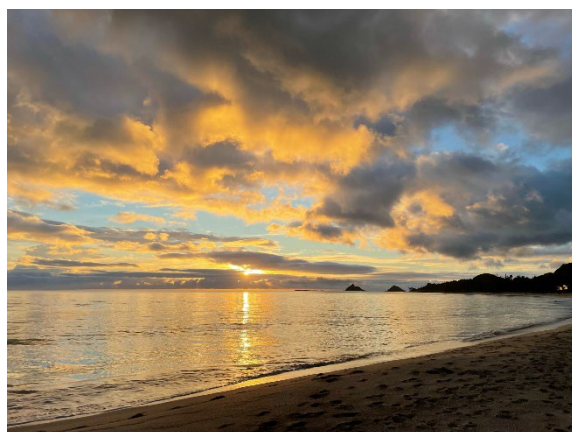


夜は、高台にある竹林さん宅に招いて頂き、美しい夜景を見ながら、バーベキューを楽しんだ。篤さんが被災地で焼き続けている焼きそばも頂いた。



3月14日(火) 帰国へ

日の出前、カイルアに住む友人宅にお邪魔し、日の出前のビーチを散歩し、美味しい朝ご飯を頂く。カイルアは素敵なビーチだ。



その後、めんどうにも PCR 検査を受け（この時期、3 回のワクチン接種がなければ日本はまだ PCR 接種を義務付けていた）、夜は別の友人を訪れ、素敵なコンドで夕飯をご馳走になり、翌日、帰路に着いた。

東日本大震災とハワイは私にとって強い結びつきがある。NY でも感じたことだが、故郷から遠く離れた所にいる日系人・日本人には、被災地への強い思いがある。ここには書けなかったことが多くあるが、日系移民やハワイに暮らす日本人の実情を知るにつけ、「土地の力」は人々とともに移動し、新たな土地の力と融合して変容しているのだと思った。

つづく